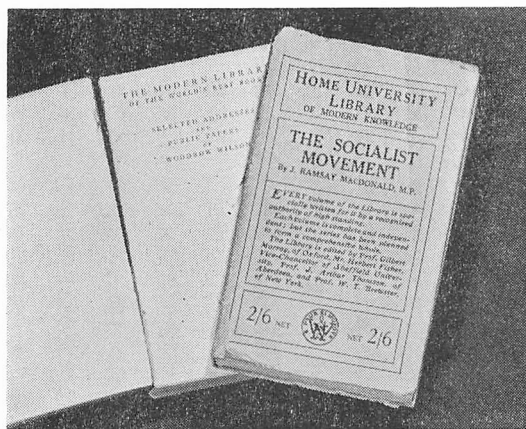


第十五章 洋書の展覧

一 洋書「文庫本」の紹介

さて、大正から昭和の初期にかけての厳しい社会状況の下で、丸善は一体どのような歩みをつづけていたであろうか。それを語る前に先ず丸善が販売した洋書類のいくつかが、わが国の出版界、否むしろ文化に与えた間接的な功績の一端を、是非ここに述べておく必要がある。

その第一に「ホームユニバーシティ・ライブラリー」を挙げることが出来る。この文庫の正しい名称は Home University Library of Modern Knowledge で、数ある英版文庫本の中、特にわが国に紹介され、所謂「五十銭文庫」として、数多の読者に愛読された。明治の末期から大正にかけて、文庫本は海外の出版界で珍重され、わが国に輸入されて好学者たちを喜ばせたものに、英国の Everyman's Library、ドイツの Reclams Universal Bibliothek などがあったが、「ホームユニバーシティ・ライブラリー」が「学鑑」で紹介されたのは、明治四十五年六月号誌上であった。この時の広告文に曰く、「全く新たに著述せられたるものを編成したるは実に此のシリーズを初めとす」と称している。その文に言う通り、当時欧米碩学の名著・新著を多数取入れて編纂したこの文庫は一般には「炉辺大学」「家庭大学文庫」とも愛称され、或いはまた「不尽の宝庫」というほど絶賛された。それ故



Modern Library と Home University Library

一般好学者の需要に応えて、大隈重信を総裁とする大日本文明協会は逸早くこの翻訳に着手し、中でも Ernest Barker 著小島幸治訳「晩近英国政治思想論」は、当時、啓蒙書として高く評価され、戦後まで広く読書界で声望を担っていた。

その第二は、通称「モダーン・ライブラリー」、正しくは The Modern Library of the World's Best Books で、その創刊は大正八年、ニューヨークに於いてであった。これは一時中絶したが、その後昭和三年ごろ、ガーデマン・シティ社発行の Sun Dial 文庫と合流してタイトルを増加し、昭和五年から大形判を併用して出版した。丸善では戦前アダム・スミスの「国富論」の翻刻の権利を獲得して大部数販売したが、此の文庫の特徴としては、「源氏物語」や「孔子」、「老子」があるかと思えば、また、カントやキエルケゴールなどを集録するといった他の文庫類と異なった体裁を具えていた。昭和十一年この社は Random House 社の系列に吸合されたが、約五百種のタイトルを包含している。

そして第三は「星座文庫」Bibliothèque de la Pléiade である。名前は星座というものの、フランスの約百人の作家の著作集で、バイブル、コーラン、ギリシヤ、ラテンの古典からマルクスのもものま

で含むいうならば古今名作集とも称すべきもので、昭和六年フランスの星座社 (Pléiade) が創刊し、同八年バリのガリマール社 (Gallimard) が引きついだ。凡そ二百タイトルを包含していて大体の頁数は千乃至二千頁にも上る大部のものであったから、自然高価で、特殊な顧客以外には、一寸手のつけようがなかった。

第四は同じフランス版の「借問集」*Que Sais-je?* である。文庫本と云うよりは百科全書と云った方がふさわしく、一冊毎に一項目をなし、また単冊であったから改訂が容易なのが特徴である。昭和十六年第一版を出し、現在まで続刊され、タイトルの予定は二千を越すという。因にこの辞典は、例えば「生物学の変遷」(Les Etapes de la biologie) 「生物学史」(Histoire de biologie) 「科学史」(Histoire des sciences) とうように、科学に関する知識を主として取り扱ったものである。

そして第五にペンギン・ブックスを挙げる。この文庫の創始者は人も知るサー・アレン・レーンで、彼は中学を卒業するや十七歳で伯父の経営する出版社に入ったが、破産寸前に直面し、弟と二人で資本金百ポンドの新社を起し、すでに世に出ている本を新たにペーパー・バックにして安く売り出そうと考え、その第一号としてアンドレ・モーロアの「シェリーの伝記」を出版した。これが定価日本円にして五十銭、読書界をわき立たせたのは言うまでもなかった。そこで矢継ぎ早やに小説、伝記、旅行記等を続刊し、そのいずれも好評で、シェイクスピア・シリーズを出すに及んで、遂に出版界に不動の地位を確保するに至った。「チャタレー夫人の恋人」をめぐる裁判で「出版の自由を守るため」に戦ったのは有名である。のちナイトに叙せられ、四つの大学から名誉博士の称号を贈られて、名実共に英国に於ける出版王の座に坐った。丸善が日ごろから廉価本輸入に目をつけ、わが国好学者の期待に添わ



Pelican Books と Penguin Books

んとしていたから、これを見逃す筈はなく逸早く店頭陳列して顧客を喜ばせたのは言うまでもなからう。

そして最後に是非つけ加えておかなければならないのはペリカン・ボックスである。これは昭和十二年の創刊で、日華事変の始め、店頭はその姿を現わし、それが図らずも、今日新書界の王者と言われている「岩波新書」誕生の発端となったのだから、実に奇縁と云う外はない。昭和四十八年四月十六日号の「週刊読書人」に吉野源三郎氏の談話が掲載されているのでその要点を転載しておく。

昭和十二年といえば、七月七日に蘆溝橋事件に端を発する日華事変が勃発、日本は次第に中国大陆での侵略戦争のドロ沼にはまりこんでいった年である。

その秋、岩波書店では、吉野源三郎氏を中心に、新しい双書を発刊する準備がすすめられていた。そして翌年十一月、赤色の表紙で縦長サイズの判型による「岩波新書」が創刊された。この判型から、その後、新書判という言葉が生まれたが、実は吉野氏たちが、この双書を発刊することになったのは、冒頭にふれたような状況に対する憂慮が動機となっていた。

吉野氏は、雪崩のごとく戦争体制に突入し、浮足だった新聞報道を眼にするたびに、こう考えた。――

とにかく私たち日本人は、この現実を直視しなければならない。

そのためには、何よりもまず、日ごとにつくる偏狭な国粹主義の思想に抵抗しなければならない。

そんなとき、ふと吉野氏が丸善の書棚で眼にしたのが、ペリカン・ブックスであった。同双書はペンギン・ブックスに二年おくれで同じ社から蘆溝橋事件のおこった昭和十二年に創刊され、秋には日本にもNo. 1からNo. 10ぐらいまでが入荷していた。その双書を手にしたときの感想を、吉野氏は、のちにつぎのようにのべている。

一九三三年にナチスが政権をとって以来、ドイツの出版は猛烈な弾圧を受けていたので、ドイツ語の新刊書を読む楽しみは年ごとに減じて来て、私たちは英語の本を通じて、やっと世界のリベラルな文化に接していたところでした。それで丸善の棚でみつけたペリカン・ブックスは、たいへん爽やかな感じで受けとられました。値段はそのころ一冊五十銭だったと思います。値段もころあいだし、型がスマートでハンディーだし、分量も読み切るのに手頃で、書目も哲学、歴史、考古学、自然科学など多方面にわたって、かつ専門家でない読者にも興味の深いものが揃っている——この形式ならば俗流に陥らないで多数の読者をつかめるのではないか、と私たちは新鮮な刺激と示唆とをこの双書から受けとりました。(激動の中で——岩波新書の二十五年)

そしてさらによく気をつけてみると、こういう紙装で縦長の双書が他の国からも出版され、この判型が世界的にも一種の流行になっていることがわかった。吉野氏は「これらの本と、その目録とを集め、そのほかにエヴリマンズ・ライブラリーやホームユニヴァーシティ・ライブラリーの目録も集めて、この種のポピュラーな双書がどのような書目を選び、どの程度で線を画しているかを、かなり熱心に調べてみた」(前出)という。

そして、同じ編集部員の小林勇氏や哲学者の三木清氏らと共同して書目や著者を決定、クリスティーの「奉天三

十年」上下巻を第一・二巻として出発したのが、今日の「岩波新書」であるが、戦後は昭和二十四年の四月に青版の表紙で復刊され、今日に及んでいる。

さて顧客側からの声を聞いて見よう。それにはまず次の対話を読んでもらいたい。

前田 あのところは君も僕も痩せていた。かみそりの刃のように痩せていたなんて言っても、子供たちは信じませんがね。世相は險惡で、僕らパスカルなどに関心を持っていなかったら、マルクス主義の深刻な波の中にもってゆかれていたはずだ。東大の中にも警官がはいてきて学生をぶんなぐって連れて行ったりしたものだ。

森 前田君が昭和六年、僕が七年に大学にはいったわけですが、ちょうど満州事変のころですね。しかし、まだ大学そのものの中は、わりあい平和でしたね。

前田 当時の大学を考えると、外国研究、外国の思想や文学の研究が、あところになって、やりさえすればどんどんできるというところに、ようやく来ていたのですね。丸善に行っても、パスカルに関する向こうの学位論文なんか、すぐ並んでいる。取り寄せても、シベリア経由ですから二週間しかかからない。当時小場瀬卓三さんが洋書係で、小場瀬さんの選択でどんどん新刊が来るわけね。あところ、僕ら非常に張り切ってたね。

森 その後輸入制限されるわけですが、当時フランのレートが弱かった関係で、フランスの本は安かった。

あのころ日本で集めたバスカル研究の文献からもれたものを、その後フランスでさがすのに苦労しました。つまりフランスで買えるものは日本で必ず買えた、特別なものは別として。そういう意味ではよき時代だったのですね。

前田 僕らの学生時代のバスカルを考えると、まだ由木康さんの訳が出ていない前ですからね。抄訳で春秋社の「世界大思想全集」の中にありましたね。

森 あれは柳田泉さんの訳。

これはバリ在住の哲学者森有正氏と仏文学者前田陽一氏との対談である。

（森有正対話集「言葉 事物 経験」バスカルの世界「晶文選集」）

次に今一つ類似の記事を掲げておこう。

窓の外はすでに白々と明けて来ていたが、少年は暗澹たる心を抱いてやっと眼を閉じた。

眼がさめたら丸善へ行って来て、それから夜は従兄の家へ行ってみよう、と思いながら。

父のためにイラストレーティド誌の注文を更新して、その係りの人につれられて喫茶店でコオフィを御馳走になった。係りの青年は田舎で英国の雑誌などをもって読む父について質問したり、かつは彼に何を勉強するつもりかといったことを深切にたずねてくれたが、少年は、実は上の空で聞いていた。

係りの青年が為替をうけとり、手続き更新のためのタイプをうっているあいだに、ちらりと眼に入った一冊の英書のが気になって仕方なかったのだ。それは薄い四六判ほどの大きさの黒い本であったが、その背に金文字で大きく KANT : COSMOGONY と刻み込んであった。

コスモゴニイなどという単語は、言うまでもなくそのときはじめてお目にかかったものであったが、少年はなんということもなく、理由もなにもなくて、直感していた。コスモというからには、きっとそれはこの悩ましい宇宙のことの一切が、あそこに解きあかされているのだ、そうに違いない、おれは運がいいのだ。そういうものが是非必要だという、そういう瞬間に、ぴたりとそれが与えられるように出来ているのだ。欲するものは必ず来るのだ、とほとんど確信した。

係りの青年は彼の学校の、しかも法学部政治学科そのものの先輩で、二年前に卒業して丸善に就職したものであった。だから少年の知らない教授たちのこともよく知っていて、あれこれ教えてくれたり質問してくれたりするのであったが、少年は次第にじれて来た。カントのコスモゴニイのそばへ早く行きたくて仕方がなかったのである。

「で、いま何を読んでいます？」

と青年が質問した。

だから、思わず、

「レニンを読んでいます」

と答えると、青年は

「うッ！」

という声を出して、あるいは声を呑んで、眼をしばたいた。

「そう……、そうですか、それは……」

と言うのである。

そうして、

「レニンを読んでいられるのでしたら、大きな論文を一所懸命読まれるのもいいでしょうが、何分やはりむずかしいですから、『狐狩りについて』とか『山登りについて』とかいう短いもの、随筆のようなものもたまに読まれると、いっそういいですよ」

と教えてくれた。

レニンの狐狩りと山登りについても話は聴きたかったが、コスモゴニイのことにも気になった。

コオフィが冷えてしまって、

「いつでも遊びに来て下さい。お父さんによろしく」

ということと喫茶店を出て、一緒に丸善へ戻った。（堀田善衛「若き日の詩人たちの肖像」(新潮社五九〇六一

頁)

そして、次の文章は、その後日語である。

しかし、若者が「I」字型になったスタンドの、入口にいちばん近い方の隅のとまり木にとまって、ぼんやりしている、ばらばらと、しかもあたかも時間をうちあわせでもしてあったかのよう、一人、二人、三人と、客たちが入って来た。そうしてそのいづれもがどす黒く疲れたものを身の蕊から匂わせているのだ。バーはほぼ満員に近くなり、空席は若者のつい横だけになってしまった。奥の方のボックスと、ニセ暖炉の前に低い卓子をおいた席とがまだ空いていたが、ここの常連たちは、女連れでない限り、減多にボックスなどに坐らなかつた。坐ったところで、誰がサーヴィスに来てくれるわけでもなかつたのである。

そのいづれにしても暗い顔つきの男たちのなかに、一人だけ、若者にしきりと眼くばせをする男がいた。若者は頭のなかを引ッ掻きまわしてみ、彼が丸善につとめている男で、若者がカントの「宇宙論」なるものを買ったときに、レニンには「狐狩りについて」とか「山登りにについて」といったよい随筆がある、と教えてくれたことを思い出した。軽く頭を下げて、若者は挨拶をした。ははあ、あれが有名な丸善細胞というものの残りの一人だったのか……。

此の両文は共に著者が在りし日のなつかしい思い出を語っている所謂回想文である。思い出であるからには多少の誤りもあるが、共通した点は、満州事変前後に於ける青年達の読書傾向——右翼や軍部に引きづられた官憲の左翼思想に対する圧迫が激しくなっていく時、極く一部の青年ではあるが、これに反発するかのよう、赤色運動の思想的基盤となったマルクス、レーニンの著作に接近し、或るものはまた煩わしい世情を離れて哲学書に親しん

だこと、それらの洋書を丸善に求めたこと、丸善の店員がその伝統的な精神に基き、よく洋書を読んで内容を咀嚼し、親切に顧客の相談にのっていたことである。前文では、注文書の輸入を迅速に行って顧客の便に供し、後者では店員が顧客の相談にのっている姿がまざまざと目に映じて来る。

二 昭和初期の読書界

では当時の一般的な読書傾向は、どうであったか。これについては已に第十一章第一節で、中村春太郎の寄稿文を引用したが、「学鑑」昭和六年三月号と四月号に「洋書界の一九三〇年」と題し、蔵良佳東が二回に渉ってこの当時の洋書について詳細に記述しており、この記事は前出の中村の記述を補う意味で重複を厭わず引用する。ところで一九三〇年は邦暦の昭和五年に相当し、その記述は、むしろその年以後の二、三年間の読書傾向を示すものとも考えられる。これを要約したり、表記したりすることは困難であるから、今は四月号のみをその原文通り次に掲げておく。(文中訂正補筆)

まず哲学、思想方面から云へば、相かはらず独逸哲学関係書が全盛をつづけ Max Scheler, Dilthey, Kelsen, Heidegger, Theodor Litt, W. Köhler, Hegel, Spann, Sombart 等が前年来と同じやうに偏頗なく読まれた。英語では Durand の “Story of Philosophy” と “Transition : Self-biography” とが特別の売行きを見せ、之に次いで “Psychology of 1930” が多くの部数を出してゐる。

ここに特殊な現象として掲ぐべきは以前は飛ぶやうに捌けて行った Marxism に関する Pamphlet 類が割合に売れなくなり更に Marx ならびに Engels それ自身の著書も前程売れなくなったこと、その反対に Anti-Marxism の本が多く出だしたことである。これは日本の読書界が現在 Marxism に就いて批判的狀態に入つたことを語るものではないだろうか。Text としての Marx の著書も一通り行き亘り、その解説的著述も大方読まれたので、いまでは反ってその反駁論を聴いて省察を深めようとするかの如く思はれるのである。片々たる Pamphlet が顧みられなくなったのが、一層この傾向を裏書きするものと云つてよからう。

続いて社会問題の本では Seligman の "Encyclopaedia of Social Sciences" が続物で且相当値の張つた出版物にもかかはらず大当りで、多数の予約購読者を得て目下第三卷までを配布してゐるが、これなども社会問題がすでにわが読書界では流行物の域を脱して堅実真摯な研究家の多くを擁してゐることを証明するものである。しかし今年中でこの部門の花形は Bernard Shaw の "Intelligent Woman's Guide to Socialism" であり、これは男女を問はずよき社会問題入門書としてひろく一般に読まれ、堅い方面としては珍らしい売行きを示した D. H. Cole の "Next Ten Years" や Lord Birkenhead の "World in 2030" も、部数から行つたらとても比べものにならぬ程この本は盛に出てゐる。ほかに文明批評の好著として Borsodi の "This Ugly Civilization", Barnes の "World Politics in Modern Civilization", Charles Beard の "Toward Civilization" の三著は、いづれ劣らぬ好評を以て迎へられた。

それからアメリカの Lindsay が口火をつけたせみかどうか結婚や恋愛についての著書が多く出て盛に読ま

れた。流石に彼の“Companionate Marriage”や“Revolt of Youth”は評判が高いために断然頭角を抜きつゝ B. Russell の“Marriage and Moral,” 及び“Conquest of Happiness” 更に Müller-Lyer の“Evolution of Modern Marriage”, Dell の“Love in Machine Age”等が若い人々の間のみでなく思想家たちの手で読まれ一般に興味ある問題を提供したのである。

教育関係では Alexander and Parker の“New Education in German Republic”, Boyd “Toward a New Education”, Bühler “Psychology of Child Life”が著しく目立って売れたが、その他の John Dewey 等斯界の権威者の著書が漸次売れ行きを増してゐるのは、単に一般教育界向上の趨勢を示すものに過ぎないのである。

さて財政経済書類に移ると、何と云つてもわが経済界の関心事が金解禁と産業合理化問題だっただけに、貨幣金融産業統制の文字を掲げた本が特別の売行きである。Reuter, Hobson, Davis 等の著書が相かはらず出た外に Mazur の“America Looks Abroad”, Denny の“America Conquers Britain”, Beard の“American Leviathan”, Dubreuil の“Robots or Men”が争つて読まれたが、中でも The Taylor Society 編輯の“Scientific Management in American Industry”が最も多く売れつゐる。なほ貨幣や金融方面では Keynes の名著“Treatise on Money”が第一の売行きを示し Irving Fisher の“Stock-Market Crash and After”, “Labor Banking Movement in U. S.” 更に Peel の“Economic War”をまた毎りがたう部数を買ひ尽した。独逸物としてこれに比較するものに Vierkandt の“Handwörterbuch des Soziologie”, Elster “Wörter-

buch der Volkswirtschaft” 及び Giese の “Handwörterbuch der Arbeitswissenschaft” 等の参考書類がある。すべて相當の成績を収めてゐる。

政治外交の部門では、云ふまでもなくロンドン条約と太平洋會議を主材にした本が、時局の問題として盛な売れを示してゐるが、前者では Harris の “Naval Disarmament”, Guichard の “Naval Blockade”, Bellairs の “Naval Conference and After” などの主たるものがあり、後者では Condridge の “Problems of Pacific” が類書をリイドする勢を見せてゐる。それから世界の注視的になつてゐるソキエト・ロシアに対してはわが識者の関心も深く、ロシアに関する著書が多く読まれるのも當然の事ながら、特に売れたものとして挙ぐべきは Grinko の “Five Years Plan”, Haensels の “Economic Policy of Soviet Russia”, Harper の “Civic Training in S. R.”, Bron “Soviet Economic Development and American Business” や “Soviet Union Looks Ahead” 等を数へることが出来るが、なほ Freeman 等の “Voices of October” や Lissitzky の “Russland: Rekonstruktion der Architektur in der Sowjetunion” など芸術方面の紹介もそれを凌駕する部数を擲いてゐる。

それにしても東洋の盟主を以て居るわが國に於て、勿論もっと近い關係の支那印度の問題が閑却される筈がない。

Young の “International Relations of Manchuria” 及び “Railway Problem of China” が非常な売行きだったことに何も不思議がない。更に支那のものでは Holcombe “Chinese Revolution” や Arlington

の“Chinese Drama”も意外に多くの読者を得てゐる。印度ものでは時節がら Gandhi に就いての本が素晴らしく出た上に Ranga Iyer の “India : Peace or War”, Osburn の “Must England Lose India” が売行きの上で注目を惹いてゐる有様である。一般東洋関係のものとしては Palmer の “Look to East” が大に読書界を賑した。

最後に日本に関するものでは、国外国内共に優秀な出版物の出現を見、売行きの上でもいづれも見事な成績を挙げてゐる。昨春予約を募集した Siebold の “Nippon” は、原本にもまゐる見事な複刻な上に索引まで附してあり、独逸出版界の復興と彼地の日本研究熱の熾烈なことを語るものであったが、果然出版元を驚かした程の読者を日本に得たし Nachod の “Bibliographie von Japan” が Wenckstern の日本書史第三卷としての出版もあってわが日本研究者の為に大なる功績をなして居る。近代日本の開扉者 Townsend Harris の “Compte Diary” に到つては、貴重な史料としても興味ある読物としてもわが読書界の寵児となつて盛に売れたのである。Parson の “Manyōshū” の翻訳、鼓教授の “Die Kunst Japan” はわが国でも噴々の好評を得、竹越与三郎氏の “Economic Aspects of Japan” もわが国内の学徒にひろく読まれてゐる。国内の上様にかかり丸善で扱った本、Cordier の “Bibliotheca Japonica” 及び Kaempfer の “History of Japan” の複刻も、貴重な文献としてわが識者の迎ふところとなった。南条博士の尊敬すべき業績三蔵經の翻訳 “Chinese Tripitaka” が学界の至宝としてあまねく専門学者に読まれたことは云ふまでもない事実で、なほ “Ancient Khotan”, “Serinda” の姉妹篇として出された A. Stein の “Innermost Asia” の如き考古学的學術書

も斯道の研究者から実に応じきれないほどの注文に接した一事も、ここに云って置きたいと思ふ。

ここに示された読書傾向は、そのまま丸善の受注にも反映し、特に時局ものが多く輸入されたが、昭和六年以後の欧州の事情は、それ以前のように静穏でなかったから、輸入状況も正常ではなかった。ところが、昭和九年八月、ヒットラーがドイツの総統になり、十年三月には再軍備を宣言する一方、出版物の輸出振興を図るために、次の輸出新規定を発表した。

即ち――

ライプチッヒ独逸書籍商組合一九三五年八月卅一日附発表

「独逸刊行物輸出新規定抜萃訳文」

輸出規定ニ関シ

独逸書籍商取扱ノ商品ニ対スル輸出新規定ハ一九三五年九月九日ヲ以テ其効力ヲ發生ス。吾人ハ該規定ニヨリ外国ニ対シ定価ヨリ二割五分減価シ得ル事ヲ茲ニ通告スルヲ欣快トス（中略）

以下此減価ニ関スル主要規定ヲ通告ス。

(A) 減価率

独逸ニ於テ出版且生産サレタル新シキ書籍・雑誌・楽譜・及教材ハ一九三五年九月九日以降、外国（瑞西国ヲ除ク）ニ於テハ定価ヨリ二割五分減価サル。

(B) 効力発生ノ時期

此ノ減価ハ一九三五年九月九日以降郵便或ハ船積ヲ以テ外国指定地ニ向ケ發送サル、全送荷品ニ對シテ有効ナリ (中略)

(C) 適用ヲ享クルモノ

減価ノ適用セラル、モノハ独逸ニ於テ出版且生産サレタル

一、ライプチツヒ独逸書籍商組合ニヨリ定価ノ維持サル、新シキ書籍・教材即チ地図・地球儀・学校用掛図等

二、尙部売雜誌及継続註文ニヨル雜誌ニシテ一九三五年九月九日以降ニ計算書作製サルベキモノ、茲ニ述ブル所謂雜誌トハ一九三四年一月四日附独逸政府新聞局長令ニヨリ、独逸雜誌出版業組合加盟員ノ出版スル雜誌ノ意ナリ。

(D) 適用ヲ享ケザルモノ

減価ノ適用ヲ享ケザルモノ

一、古キ (Antiquarisch) 書籍・教材・雜誌・樂譜・及定価ノ廃棄サレ居ルモノ並ニ売価ヲ附セザルモノ

二、既ニ計算済ノ予約雜誌

三、新聞

四、独逸政府新聞局・図書館及ビ音楽局所屬會員 (出版業) ニ非ザル者ノ刊行物 (以下略)

そこで丸善では直ちに一般顧客に対して

謹啓 秋冷の候愈御清祥奉慶賀候

陳者今般独逸国政府は同国出版物の輸出振興を策し本年九月九日以降外国向け書籍及引続発行の雑誌予約に対し式割五分の補償を行ふ事に相成、書籍に対する弊社方針は不取敢九月十九日附公表仕候処雑誌も同率の補償を享くるものに有之、学界のため御同慶に奉存候右補償は九月九日以降独逸に於て外国向け計算書作成成分より適用を享くるものに有之、随つて該適用を享けたるものは弊社も亦其適用価を以て精算可仕候 就ては御参考までに別紙輸出新規定抜萃御高覧に供し候

即ち補償法適用を享くる雑誌は従來の定価（郵税を含まざる）より式割五分安と相成可申候間今後特に一九三六年度予約期目睫に迫り候折柄多数御選定御用命被仰付度御通知旁懇願仕候
尚新目録は目下準備中に有之候に付御含み願上候

昭和十年十月

敬 白

丸 善 株 式 会 社

のような挨拶状を送り、ドイツ書輸入の好機であることを強調した。

三 洋 書 展 覧 会

洋書輸入販売を表看板とする丸善では、この他に洋書に関する展覧会等を開いて、洋書に対する一般の関心を高めるために、昭和七年度に四種類の展覧会を開いたが、そのいずれも期待以上の好成績を収め、大いに意を強くした。

展 覧 会 名	会 期	出 品 点 数
書籍に関する書籍の展覧会	昭 七 年 二 月 五 日 ~ 十 五 日	約 九〇〇点
ゲーテ百年祭記念文獻展覧会	昭 七 年 三 月 十 五 日 ~ 二 十 五 日	約 一、〇〇〇点
新刊英書展覧会	昭 七 年 四 月 二 十 日 ~ 三 十 日	約 二、〇〇〇点
天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展覧会	昭 七 年 十 一 月 十 七 日 ~ 二 十 四 日	一七八点
沙翁文獻展覧会	昭 八 年 五 月 二 十 日 ~ 二 十 九 日	約 一、五〇〇点
モリス誕生百年祭記念展覧会	昭 九 年 四 月 二 十 四 日 ~ 五 月 三 日	二八〇点
伊太利代表書籍展覧会	昭 十 年 五 月 十 三 日 ~ 二 十 二 日	一一一点
西洋好事本展覧会	昭 十 二 年 五 月 二 十 四 日 ~ 三 十 日	四三〇点

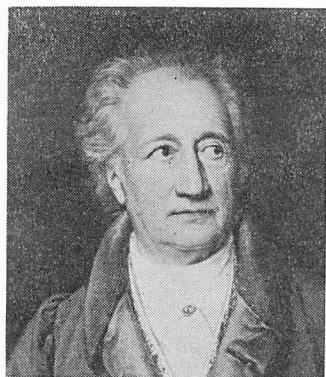
これらは凡て東京本店で開催されたが、中には地方の支店に廻送されて出陳されたものもあった。そこで次に順を逐い、これらの内容について略記しておく。

(一) 書籍に関する書籍の展覧会

新古の書誌を初め、文字・印刷用紙・印刷術・装幀・目錄編纂法・蔵書票等に関する欧米の書籍を集めて出陳した。特に英国デント社の好意により、エブリマンス・ライブラリー (Everyman's Library) が原稿から本に成るまでの全工程を実物で示した特別出品があり、読書人に対して出版の知識を与えると共に、印刷出版界に対しても好個の資料を提示した。

(二) ゲーテ百年祭記念文献展覧会

昭和七年三月はドイツの大詩人ゲーテの死後百年目に相当するので、日本ゲーテ協会・日独文化協会後援の下にこの展覧会を開いた。ドイツの各有名諸書店は、この企てに賛同し、ゲーテの著作並びに彼に関する文献を多数送



ゲーテ肖像

付し、主要なものだけでも凡そ一、〇〇〇点に達した。駐日ドイツ大使ホレッチは二回に渉って来観し、ドイツ文学研究者は素より、一般文化人の来場も多く、わが国の外国文学愛好者に大きな反響を呼び起した。

(三) 新刊英書展覧会

この展覧会は駐日英国大使リンドレーの後援により、英国出版協会と丸善との協力の下に開催された。英国の有力な出版業五十二社が参加し、昭



耶蘇会版「ギヤ・ド・ペカドル」扉

和六、七年両年度に出版した所謂新刊書凡そ二、〇〇〇点を送って来たので、各部門に従って配分展示した。

(四) 天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展覧会

特に「珍籍展覧」とうたったわけは、稀有の珍本耶蘇会

版「ギヤ・ド・ペカドル (Guia de Pecador)」の邦訳本

上巻を、昭和六年に丸善が、イタリーのオットー・ランゲ

H (Otto Lange) 古書店のガリ版刷目録に載っていたのを

急いで電報で取り寄せて手に入れ秘蔵していた。これはスペインの高僧レイ・ド・グラナダの著作になり、その邦訳本は慶長四年（一五九九年）正月に上巻、同年三月に下巻が長崎で出版された。これまでわが国には一部も存在せず、全世界を通じて、ロンドンの大英博物館所蔵本上下二巻、同地マッグス書店旧在庫本下巻、バリーの国民文庫所蔵本下巻、ローマのバルベリニ文庫所蔵本下巻の四部に過ぎないという、文字通り稀観書であった。それが丸善の手に入ったのだから、是非とも好事家の目を楽しませたく、密かにその機会をねらっていたと云うのが偽りない事実であった。時宛もよし昭和七年は、九州の老友、有馬、大村の三侯が、宣教師バリニヤニの勧めに従い、遣欧使節を派遣したが、これらの使節が長崎を出発した天正十年（一五八二）から数えて丁度三百五十年目に相当するので、この両者を結びつけて展覧会開催に踏み切ったのであった。尤も展覧会会期の十一月には、遣欧使節は

南支のマカオに滞留していたのだが。そこで丸善がこれ迄集めて来た天正の遣欧使節、伊達政宗の欧南遣使、マルコ・ポーロの東方紀行、フランシスコ・ザビエルに関する書籍類二十四種、天文・慶長・元和にわたる耶蘇会士通信約三十冊、文禄五年（一五九六）の二十六聖人の殉教、元和八年（一六二二）長崎に於ける切支丹五十五名の大殉教に関するもの等合計一七八点に東垂の古地図四五点を出陳した。しかも姉崎正治、浜田耕作、幸田成友、太田正雄、佐伯好郎等の諸博士たちが、それぞれの所蔵にかかる書籍・写真等この壮举を耳にして提供されたので、更に一段の光彩を放ち、専門家を始め各方面から我が国の文化史上空前絶後の試みであるとして多大の絶賛を博した。

「展覧会当日の模様について、『学鑑』昭和七年十二月号に左のような記事が載っている。

「天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展を見て」 吉田小五郎

（前略） 歐洲を沸きかへらせた遣欧使節が帰朝と同時に将来された印刷機によつて、加津佐、天草、長崎等で続々、所謂キリシタン版が印行せられた。「ぎや」も亦その一つである。従来キリシタン版で、その存在の明らかなものは二十四種、中日本にあるものは僅か八種であつた。序にその書名と所蔵者の名を挙げておかうなら、

国字本

（一） サクラメント手引抄

刊行年未詳 伊藤長藏氏藏

(二) どちりな・きりしたん

慶長十五年長崎刊 東洋文庫藏

(三) こんてむつす・むん地

慶長十五年京都刊 林若吉氏藏

ローマ字本

(四) ドチリナ・キリシタン

文禄元年天草刊 東洋文庫藏

(五) ドチリナ・キリシタン

慶長五年長崎刊 徳川(水戸)公爵家藏

(六) サカラメントの葉

慶長十年長崎刊 東洋文庫藏

(七) スピリツアル修行の珠冠の手引

慶長十二年長崎刊 長崎大浦天主堂藏

(八) フロスクリ

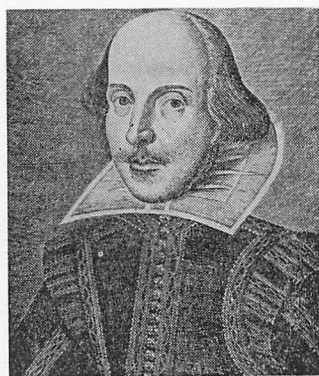
慶長十五年長崎刊 東洋文庫藏

(三)(五)(七)の外は皆、近時外国から回収されたものであるが、今回の丸善本「ぎや」で又一つ加はつた訳である。一書肆の悦びに止まらない。大袈裟にいへば国家的の悦びといつてよろしからう。二、三年前幸田博士が歐洲留学中に、この展覧会と縁故の深いサンデの「遣欧使節記」を入手され、自分一己の誇の為ぢやない、日本の為だと思つて八方無理して買取つたと力んでゐられたのを思ひ出す。

さて、展覧会は、この「ぎや・ど・ぺかどる」を中心に、天正使節一件、伊達政宗の第二回遣欧使節一件に関する古版本を真先に、日本伝道の先覚シャヴィエル上人に関する書籍二十幾種かをその次に、順次、耶穌会通信類、二十六聖人関係、元和大殉教関係、前代のよりも寧ろ稀覯とされる一六〇〇年以後の比較的よく集まつてゐると思はれた報告類等々が、ガラス板の下にパノラマのやうにのぞかれた。例の「ぎや・ど・ぺかどる」

に至つては、光悦本を想はしめる豪華の原裝そのまゝの糸の縋りや裏表紙を見せようとして、鏡を応用された氣転と親切さは感謝すべく、なほ一群の通史類が別な戸棚に納まつてゐた。之等の書籍——どれ一冊だつて我の小使ではどうしやうもない——の一人に就いては、贅言するまでもなく、非常に立派な目録が発行されたから、一切それに譲るとしよう。この目録には感心した。展覽された百七十八種の本のタイトル・ページそれのないものはコロホン全文を記して、それに本の大きさ、巻数、丁数、頁数、発行年、発行地、ゾムメルフォーゲル、コルディエ、ストライト等有名な目録を検索して一々有無を記し——之だけでも並大抵ではあるまい。古版本のタイトルを写し文字の大きさを決めることは厄介だ——その上一々親切な解説をつけ、更に豊富な図版を挿入してあり、印刷も美しくよく整つてゐること一見マッグス書店の目録を連想させる。日本で一書肆の目録として、之だけ整つたものは恐らく空前であらうが、又絶後とならぬことを希望する。兎に角我々は、この目録作製の任に当られた方々に心からの敬意を表したい。(後略)

ここに言う目録とは「天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展覽会目録」のことで、その題字は新村出博士の筆になり、本文として幸田成友博士の「天正遣欧使節について」、村岡典嗣博士の「ぎや・ど・ぺかどる解説」を、次に丸善出品の一七八点の書籍については、そのタイトルページを載せ、之がないものはコロホン全文を記し、これに本の大きさ、巻数・丁数・頁数・発行年・発行地を加え、更に一々解説を附し、図版も豊富に挿入されている。また諸家出品のもの及び東亜古地図目録は附録とし、同じ方法で解説を加え、更に出品物所蔵者名、出品書の人名及び書名・索引を添え、完璧な目録をつくつた。



シェークスピア肖像

尚、会期中の十一月十九日には「初期日欧文化交流座談会」の例会を本店階上喫茶室に開き、今後に於ける此種の企画について諸賢の意見を聞いたことも、錦上更に華を加え、多くの有益な資料を得て、予期以上の成果を収めた。

(五) 沙翁文献展覧会

この展覧会は日本シェークスピア協会・駐日英国大使リンドレー後援の下に、丸善が主催して開かれた。この時も又英国出版協会の協力により、シェークスピアの著作並びにシェークスピアに関する新古文獻約一、五〇〇点を出品することが出来た。英文学者市河三喜、菊川正勝、池田文痴庵等知名人の特別出品もあり、シェークスピアの名が古くからわが国の人々に親しまれていただけに多数の来観者を得て盛會裡に閉会した。因にこの展覧会の參觀者に配布した「沙翁文献展覧会目録」の題字は坪内逍遙の手になるものである。

(六) モリス誕生百年祭記念展覧会

ウィリアム・モリスの誕生百年を記念するため、その文獻絵画展覧会をウィリアム・モリス研究会主催、丸善後援で開いた。正確に言えば三月二十四日が彼の生誕月日に相当するが、諸種の都合で一か月おくれの四月二十四日

から十日間、本店で開いた。出陳された種目は、

一、英文のモリス原著及仏独日その他の翻訳書

二、モリスに関する研究文献

三、ケルムスコット版出版書

四、モリスの絵画その他の工芸作品とその複製写真

五、モリスの肖像画及び写真

で、出品者は東京帝大図書館、岩倉具栄、伊藤長蔵、市河三喜、石橋武助、長谷川誠也、西村稠、本間久雄、大槻憲二、柳宗悦、小檜山政英、斎藤勇、佐藤清、山宮允、北野大吉、宮田斉、白鳥省吾、繁野純、日高只一、日夏耿之介、森口多里等であった。これらの出展品目の中、ケルムスコット版と言うのは、モリスが、彼の邸宅内のケルムスコット・プレスで自著を始め、チャージャー、シェークスピア、キーツ、ロゼッティなどの名著を、美しい活字と意匠を以って限定出版したものをいう。

尚、此の時目録をかねた「モリス書誌」が出版配布された。内容は出陳品目と、それ以外のモリス著作のドイッ訳、モリスに関する欧文研究書並に参考書目録で、附録としてモリスの著作年代目録、ケルムスコットプレス出版書及びモリス年譜を加えているのも、編集者大槻憲二の周到な手腕がうかがわれ、英本国でも類例を見ない「書誌」であると絶賛された。

(七) イタリア代表書籍展覧会

主催者イタリア書籍聯合協会、後援駐日イタリア大使アウリッチ及伊学協会で開かれたこの展覧会には、古写本の複製を始めとし、現代小説類に至るまでの当時のイタリア印刷文化をしのぶに足る代表的な書籍一二一点が陳列された。その類別は文学書三二点、美術書二七点、地歴地図四七点、科学及び其他一五点で、その中でもダンテ神曲六〇〇年記念本、ヴィルゼリオのコーデイチエ・メデイチエオの複製本は、見るものの目を驚かした豪華版であった。

(八) 西洋好事本展覧会

好事家の好みに投じて珍書奇書を展示したのがこの展覧会で、左に挿入した「西洋好事本展覧会略目」(「学鐙」広告)からその一端を察することが出来るように、八十九項目四三〇部の好事本が展覧され、売約に応じた。尚、観客の便に供するため、菊判約九〇頁に及ぶ立派な目録が出版され、木村毅の序文を巻頭にして出陳書籍の解説を加えた極めて重宝なものであった。

西洋好事本展覧会略目

本略目は別記西洋好事本展覧会に出陳中より採択せるもの、珍書あり、奇本あり、怪書あり、魔書あり、其項目を挙げれば看板広告・迷路(八幡の簀知らず)・爪楊枝・あやとり・火と焰・洞窟・暦・水の映像・明滅漫画・棉の伝説・若者と娘・ローマ水道・アラビヤの井戸・アラビヤ数字・ハレム・消防・世界災厄史・潜り・

花火・鍊金術・選挙史・放送局・性・糞便学・割礼・貞操帯・性器及大蛇崇拜・鞭打ち・医学史・薬物史・お
ばけ・悪魔・魔神・おまじなひ・迷信・夢・墓・葬式・屍体発掘・焼場・紋章・姓氏・Signs & Symbols・
侏儒・サーカス・見世もの・ジプシー・乞食・浮浪人・服飾・帽子・ステッキ・美粧・博物館・乗もの・切
手・武器・指輪・古銭・玩具・ベル・名鐘・煙草・酒・珈琲・茶・釣・賭博・富籤・動物文学・カルタ・デス
マスク・民芸・あやつり・風景等々。